生徒が主体的に活動するための工夫を盛り込んだ授業の展開
－学力の三要素を高める日本史学習指導－

大分県立杵築高等学校　井上　重幸

はじめに

現行の学習指導要領解説では改訂の要点のひとつとして，「言語活動の充実や学習内容の確かな定着を図り，歴史学習にかかわる基本的な技能を段階的に高めて歴史的な見方や考え方を身に付けさせるように，諸資料を活用して歴史を考察し表現する学習を，通史的な学習内容とかかわらせて計画的に実施するようにした」と記されている（注１）。また，高大接続システム改革の一環として創設される大学入学希望者学力評価テストでは「知識・技能を十分有しているかの評価も行うことに加え，『思考力・判断力・表現力』を中心に評価する。このことにより，大学入学に向けた学びを，知識や解法パターンの単なる暗記・適用などの受動的なものから，学んだ知識や技能を統合しながら問題の発見・解決に取り組む，より能動的なものへと改革する」（注２）ことが掲げられ，「歴史系科目においては，歴史的思考力等を含め，思考力・判断力・表現力を構成する諸能力の判定機能を強化する」（注３）と記されている。

しかし，現在までの大学入試では知識の再生が重視されていた。この影響から高校の日本史授業では「教科書の知識を網羅すること」「知識を定着させること」「定着させた知識を再生させること」に重点を置いた知識講義型授業が行われている。また，進学力強化のための国英数３教科の単位増や学習指導要領改訂にともなう理科基礎科目の単位増により地理歴史科目は単位を減少させている。一方，教科書内容を網羅することやセンター試験での数値目標などの要求には変化がなく，高校日本史の授業の現場では，授業を効率化することでこれらの問題を解決しようとしてきた。このことが知識講義型授業への依存を一層強めることになった。しかし，大学全入時代のなかで入学選抜試験が機能していない進学先を希望している生徒も存在する。このような生徒は授業進度の確保と成績の保証を目的とする知識講義型授業には関心・意欲が低く，学習への動機付けを形成できないまま学力を低下させている，という問題も生じている。

そこで，現在の高校日本史の授業には「学習指導要領や大学入学希望者学力評価テストで要求されている思考力・判断力・表現力の育成」「現行の入試制度で重視されている知識の保証」「学力を低下させている生徒の学習意欲を喚起するために授業の中で学習への動機付け」という問題があると考えた。

Ⅰ　生徒の実態と研究の方向性

１　学習に対する生徒の実態

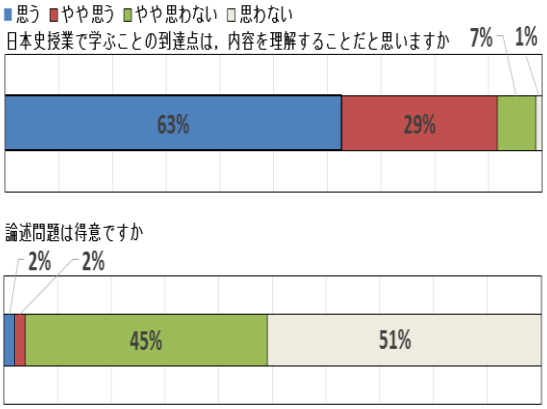
(1) 実態調査の方法と内容

生徒が主体的に活動する授業を構成するために，「生徒の関心・意欲」「生徒が主として使用する学習方略」の視点で「高校日本史における生徒の学習実態と関心・意欲」に関する22項目の意識調査を行った。対象は本校３年生日本史Ｂ選択者83名である。

(2)　調査結果からの考察

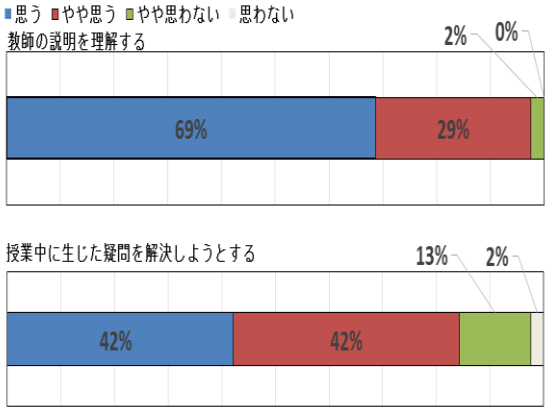
資料１のように，92％の生徒が「日本史授業で学ぶことの到達点は，内容を理解することだと思いますか」という問いに肯定的である。また，理由として「現在の日本が構成された理由が分かる」「現代との比較が面白い」と回答している。これらの回答から生徒は日本史授業の内容を理解し，思考しようとしているように見える。しかし，資料１の「論述問題は得意ですか」という問いには96％の生徒が苦手だと回答している。その理由を「深く理解できていない」「知識が曖昧」と回答しており，授業後に生徒は目標とする到達点に届いていないことが分かる。

＜資料１＞生徒実態調査①



また学習態度に関する調査，資料２の「授業中に教員の説明を理解する」では約69％の生徒が強く肯定したが，「授業中に生じた疑問を解決しようとする」では強く肯定する生徒が42％となっている。実態調査から現在までの知識講義型の授業は生徒を受動的な学習へ導きやすいことが分かる。そして受動的に学習した成果として生徒が獲得した知識・理解は不完全なものであり，生徒は，知識を活用して思考し，論述問題を解答するという学習段階までは進むことができていないことが分かった。

＜資料２＞生徒実態調査②



２　生徒が主体的に学ぶ授業作り

授業手法を学ぶため，大分市立碩田中学校井上聡指導教諭，大分県立高田高等学校宇佐美悦子指導教諭，大分県立大分豊府高等学校岡義宏指導教諭，大分県立杵築高等学校池邉良介指導教諭の授業を参観し，授業手法について学んだ。

全ての先生方の授業に共通する手法は，「学習した知識を授業の中で活用することで，生徒が自己決定感を高めている」「思考・判断の結果を表現する対話活動を重視し，この活動によって共感的人間関係が形成されている」「生徒の活動が肯定的に評価されており，生徒が自己存在感を高めている」という３点であり，生徒指導の三機能が重視されている点であった。また，高校の指導教諭の先生方に共通する手法は，授業の中で習得した知識を当該授業の中で演習という形で使用することで，知識・技能の定着を図ることであった。

また，市川伸一の「『教えて考えさせる授業』を創る」を参考に「教員が教科書記述の内容を端的に説明する」「生徒同士の対話活動により理解を確認する」という構成が通常の日本史授業の中で思考活動を展開するために適しているのではないかと考えた。

Ⅱ　歴史的思考力を促すための工夫

１　歴史的思考力の定義付け

学習指導要領では，歴史的思考力を培うことを目標のひとつに掲げているが，これまで歴史的思考力の明確な定義付けが行われていなかった。しかし，資料３の高大接続システム改革会議第３回資料では，大学入学希望者学力評価テストで評価すべき思考力・判断力・表現力が定義された。これらの力は日本学術会議が提言した歴史的思考力を基礎として提言している。これを踏まえて，本研究では日本学術会議が提言した「過去への興味・関心」「歴史的資料の調査力」「歴史的分析・解釈力」「時系列的思考力」「意思決定の連鎖としての歴史的学習」を日本史授業の中で育むべき歴史的思考力とする。

＜資料３＞高大接続システム改革会議第３回資料（注４）

大学入学希望者学力評価テストで評価すべき思考力・判断力・表現力
- 歴史上の出来事や事象の因果関係，歴史上の出来事と現在との関係を多面的・多角的に考察する力
- 歴史の発展の多様な可能性や多様な解釈を根拠を元に考える力
- 歴史資料をよみとき，資料としての適切性や妥当性を評価したり，判断したりする力
- 歴史資料と歴史上の事象との関わりを推論する力
- 歴史上の出来事を時系列的に分析したり，因果関係を分析したりする力
- 歴史資料を活用して探究し，論述したり討論したりする力
- 歴史を「過去の人々の意思決定の連鎖」として捉え，自らのこれからの意志決定に示唆を得る力

２　日本史授業の中で歴史的思考を行うために使用する思考スキル

高校日本史の授業やテストでは知識の定着と再生が重視されてきたことは前述したが，国立大学の個別試験で出題される論述問題では，知識を基礎にして思考を行い，その結果を表現することが課されてきた。例えば，東京大学の入学選抜試験では「出題の意図を読み取って，題意に沿って解答することができる」「知識・理解を基礎として，これらを組み合わせることで時代を縦断した思考や分野を横断した思考を行うことができる」「自身が獲得している知識・理解と提示された歴史資料を関連づけて思考することができる」「知識・理解を基礎に思考した結果を外部に適切に表現することができる」という力が評価されてきた。このことを参考に国立大学の入学選抜試験で出題された思考スキルを分析することで，高校日本史の授業で使用される思考スキルを整理できると考えた。河合出版，Ｚ会出版，旺文社，教学社の出版する大学受験論述対策問題集を分析し，日本史授業の中で使用する思考スキ

ルを資料４のように，「時代区分・分野別分析」「推移」「原因・目的」「変化・結果・影響」「意義・意味」「対比」「総合」「その他」と整理した。本研究の検証授業での歴史的思考ではこれらの思考スキルを使用する。

＜資料４＞日本史授業で使用する思考スキル

	類型	イメージ	使用する思考スキル
1	時代区分 分野別分析	A・B・Cを区別する (A／B／C)	順序立てる。筋道立てる。 構造化する。分類する。
2	推移	AからBへの変化を 考える (A ⟶ B)	順序立てる。筋道立てる。 構造化する。 変化をとらえる。 関係付ける。
3	原因 目的	AからBへの変化を Aに注目して考える (A ⟶ B)	順序立てる。筋道立てる。 変化をとらえる。 構造化する。関係付ける。 焦点化する。
4	変化 結果 影響	AからBへの変化を Bに注目して考える (A ⟶ B)	順序立てる。筋道立てる。 変化をとらえる。 構造化する。関係付ける。 焦点化する。見通す。
5	意義 意味	AからBへの変化に Cが果たした役割を 考える (A ⟶ B) C	順序立てる。筋道たてる。 変化をとらえる。 構造化する。関係付ける。 焦点化する。見通す。
6	対比	AとBを比較して 特徴などを考える (A ⟷ B)	比較する。多面的に見る。
7	総合	時代や分野を重層的や 多面的に考える	多面的に見る。 構造化する。 抽象化する。具体化する。
8	その他	出題者の意図に沿って 考える	焦点化する。
		解答条件の長短や制限 時間の長短に合わせて 考える	抽象化する。具体化する。

Ⅲ　検証授業の実際と考察

１　検証授業

(1) 検証授業の概要

指導教諭の先生方の授業分析や先行文献から「獲得した知識を活用して教科書記述の背景を考え，その結果から歴史の諸問題と現代社会の問題点との共通点に気付く学習を対話によって行う」授業は学力の３要素を高めるのではないかと考えた。この仮説が高校日本史の３つの問題を解決できるのかを実際の授業によって検証する。

杵築高校３年生文Ⅰコース（文系３教科型）日本史Ｂ選択生32名を対象に，「第９章近代国家の成立　２明治維新と富国強兵」から，小単元「議会政治への道」を設定して４時間の検証授業を行った。学習指導要領の「（４）近代日本の形成と世界『近代国家の形成と社会や文化の特色について，国際環境と関連付けて考察させる』 ア，明治維新と立憲体制の成立『開国と幕府の滅亡，文明開化など欧米の文化・思想の影響や国際環境の変化，自由民権運動と立憲体制の成立に着目して，明治維新以降の我が国の近代化の推進過程について考察させる』」にもとづき，評価規準及び評価基準を設定した。

＜資料５＞小単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現
我が国の立憲化に対する関心と課題意識を高め，意欲的に追究するとともに，現代社会の諸問題への関心を高めている。	我が国の立憲化の推進から課題を見出し，欧米の影響や国際環境の変化と関連付けて多面的・多角的に考察するとともに，国際社会の変化を踏まえ公正に判断している。
資料活用の技能	**知識・理解**
我が国の立憲化の推進に関する資料から有用な情報を選択して自身の主張の根拠とするとともに，考察した結果を根拠と論拠を明確にすることで説得力をもって伝えることができる。	我が国の立憲化の推進に関する基本的な事柄を欧米の影響や国際環境の変化と関連付けて総合的に理解し，その知識を身につけている。

＜資料６＞単元構想表

思考スキルを使用して歴史的思考を行う	第1時　明治初期の対外関係	思考スキル
		対比：先進国と途上国の要素を対比することで，明治維新期の日本の国際的立場を知る。 総合：明治政府の外交のメリットとデメリットを分析し，明治政府の外交の結果を総合的に判断する。
		現代社会を考える
		明治政府の外交の目的を通じて，現代日本の外交課題を見る。
		評価規準
		〔思考・判断・表現〕 明治初期の外交から課題を見出し、国際環境の変化と関連付けて多面的・多角的に考察している。
	第2時　新政府への反抗	思考スキル
		対比：明治政府への不満を集約し，分類することで明治初期の国民の成熟度を知る。 原因：明治政府の政策への人々の不満を分析することで，近代化への課題の原因を考察する。 抽象：理解した具体的な内容を抽象化することでまとめる。
		現代社会を考える
		明治初期の国民と自分自身を対比して共通点を認識する。その結果から，政治に参加する上で自分自身に不足している資質に気付く。
		評価規準
		〔思考・判断・表現〕 明治政府の近代化政策に課題を見出し、現代の政治と関連付けながら多角的・多面的に考察することができる。
	第3時　自由民権運動	思考スキル
		意義：自由民権運動の性格の変化を通じて，国民の成熟度の高まりを理解する。
		表現・論述問題
		・分析・評価した情報を根拠として自身の考えを主張する。 ・論述問題の出題意図を適切に読み取って，題意に沿って考えを表現する。
		評価規準
		〔思考・判断・表現〕 自由民権運動に関する情報を分析・評価し，考察した結果を根拠と論拠を明確にして，説得力をもって伝えることができる。
	第4時　議会政治への道	思考スキル
		総合：1870 年代～1880 年代の文学史や経済史の推移を理解する。知識を背景に自由民権運動が国民的運動に変化したことを考えることから明治時代の国民の成長に気付く。 変化：経済の後退の影響から 1880 年代半ばの自由民権運動は個人の利益を優先した運動へと変質したことを知る。
		現代社会を考える
		個人の利益と全体の利益は矛盾する場合があることを知る。ここから政治に参加する公民としての態度を考える。
		評価規準
		〔関心・意欲・態度〕 議会政治への課題意識を高めるとともに、現代の政治問題への関心を高め、意欲的に追究している。

資料５の評価規準から「思考・判断・表現」の「我が国の立憲化の推進から課題を見出し，欧米の影響や国際環境の変化と関連付けて多面的・多角的に考察するとともに，国際社会の変化を踏まえ公正に判断している」という小単元の評価規準を重視し，資料６のような単元構想表を作成した。歴史的思考力からは「意思決定の連鎖としての歴史的学習」を重視し，歴史を「過去の人々の意思決定の連鎖」としてとらえ，自らのこれからの意思決定に示唆を得る力を育むことを目標とした。また過去の大学入試の論述問題を参考にし，教科書記述の背景を探る題材としての論述問題を作成した。

導入では現代社会で争点となった身近なものを主発問として扱う。生徒はこれまでの生活や学習で獲得した知識を活用して主発問を思考する。その後，教科書内容の伝達を行う。この知識をもとに，教科書の内容を分析・操作する活動を行うことで歴史の背景を考える。更に，歴史の背景と主発問を関係付けることで，現代社会に必要な公民としての資質に気付く，という授業構成とした。

(2) 検証指標

検証指標として，４時間の検証授業後に実施するアンケートで「日本史論述問題への苦手意識が減った」と回答した生徒の割合を60％以上，「授業の中で思考することができた」と回答した生徒の割合を80％以上，「本日の授業の内容を友人に説明できる」と回答した生徒の割合を80％の３点を設定する。

２　検証授業の例（４時間実施中の２時間目）

(1) 前時の流れ

第１時では，社会進化論を理論的背景として，帝国主義のもとで欧米列強による植民地政策が正当化されていたことを確認させた。そして，19世紀の弱肉強食の国際関係の中で日本の独立を維持する必要があったこと，そのために明治政府の外交は，一等国としての国際的地位を獲得することを目標として展開したことを通じて，外交の目的を学ばせた。また，国益を重視した明治政府の外交が東アジアに緊張を生んだ事実から，現代日本が抱える外交問題を想起させた。

(2) 本時の内容

本時は，「明治政府が主導して行った近代国家への改革に不満を募らせた人々は，士族反乱や自由民権運動・一揆という形で反抗した。明治政府は近代化改革を継続しつつ，人々の不満に対応する必要があった」ことを理解する内容である。

明治政府の目指す近代国家は，国民の権利を保障するものであるにも関わらず，近代化に国民が反発する理由の背景について教科書には記載されていない。明治政府の課題を「人々の反抗とその対応」という表面上の課題のみをとらえるのではなく，反抗の根底には近代国民としての成熟度が足りないという課題があることを認識することで，現代社会を生きる日本人として必要な資質に気付かせ，自分たち自身の成長の必要を感じさせたい。

本時の思考・判断・表現の評価規準は，「明治政府の近代化政策に課題を見出し，現代の政治と関連付けながら多角的・多面的に考察することができる」と設定した。また評価基準を「Ａ明治政府の近代化政策の課題と現代社会との共通点を考察している。Ｂ明治政府の近代化政策の課題を考察している。Ｃ明治政府の近代化政策の課題を考察できていない」とした。

(3) 論述問題

大阪大学1998年の入試問題「明治維新期には士族反乱があいついだ。元参議が中心となって起こした例を３つ挙げ，こうした士族反乱が起こった原因と，それが与えた影響について 200字程度で述べなさい」を参考とした。解答例は，「佐賀の乱，萩の乱，西南戦争。明治六年の政変で下野した政治家の不満や明治維新に功績があったにも関わらず，大久保政権が進めた廃刀令や秩禄処分などの近代化政策によって特権を失った士族の不満が原因となって士族反乱が起きた。しかし，西南戦争で西郷隆盛が敗北したことで中央集権化が進むとともに，武力による不満の表明は事実上不可能となった。そこで人々の政府への不満は自由民権運動に集約されることになった」である。この論述問題には，「士族反乱の具体名」「士族反乱の原因」「士族反乱の影響」という三つの要素が含まれている。これを参考に，第２時の思考・判断・表現の評価基準のＢを満たす論述問題として，「1876年に士族反乱が集中する原因を明治政府の政策と関連付けて書きなさい」を設定した。

(4) 授業の実際

2014年の衆議院選挙の際に発表された資料７の二大政党のマニフェストから，生徒は支持する政党を選択した。そして，生徒自身の選択において公的な要求と私的な要求のどちらが優先したかを確認することで，生徒たちは自分たちが政治に要求するものが私的な要求に偏っていることを認識した。そこで公民分野の「社会契約

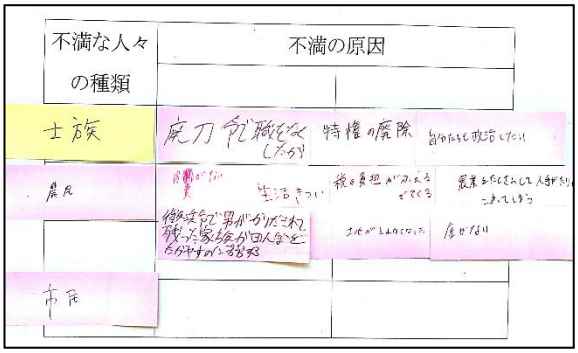
論」を念頭に置きつつ，個人の利益のみが主張される状態では社会は円滑に運営されない，ことを押さえた。

＜資料7＞政党のマニフェスト

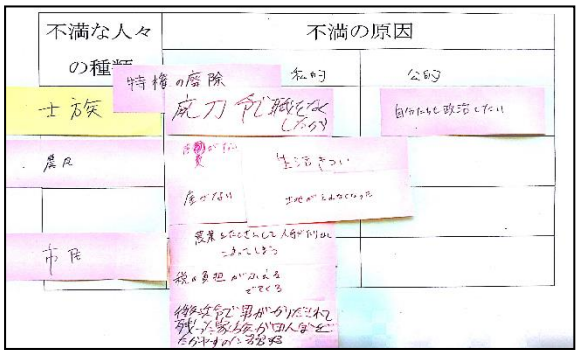
	経済	安全保障
A党	・消費税2017年10% ・法人税引き下げ ・住宅ローン減税 ・新幹線，高速道路の整備	近海の秩序への挑戦には関係国と連携して対応する
B党	・法人税の条件付き引き下げ ・中古住宅の活性化 ・公共事業の見直し	・専守防衛 ・日米同盟の強化 ・関係住民の負担軽減

その後，教科書内容を確認し，この時期の明治政府の課題として，民衆の政府への反抗に対応する必要があることを押さえた。そして資料８のように，人々の反抗の原因を探るため，明治政府に不満を持つ人々とその不満について列記させ，更に資料９のように不満を公的な不満と私的な不満に分類させた。不満の分類から，生徒は明治政府の近代化政策への人々の不満は前近代的な個人の立場から噴出していることに気が付いた。政府への不満の性格を考えて分類するという活動によって，生徒は「明治初期の人々に近代的国民としての資質が育まれていない」ことが政府への反抗の原因であることの理解が進んだ。

＜資料８＞明治政府への不満①

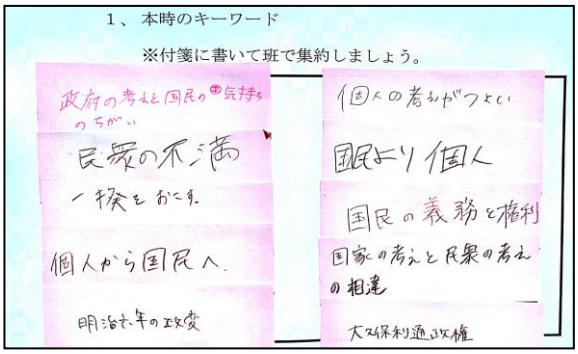


＜資料９＞明治政府への不満②

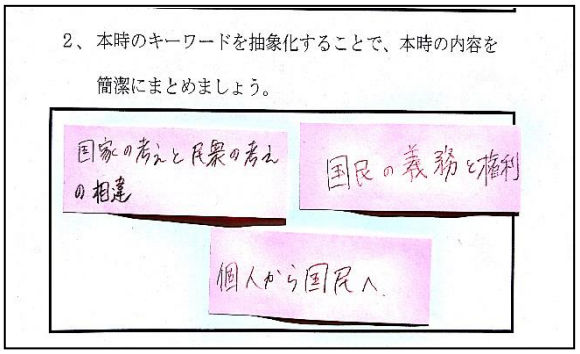


次に，本時の内容のうち重要であると判断したものを選択して，資料10のように班で集約する。更に，班で協議して，集約した情報の中から，より重要な情報を資料11のように選択した。その後，選択した情報を使用し，本時の内容を抽象化して簡潔にまとめるという活動を行った。活動後に指名された発表者は本時の内容を「政府の考えと民衆の考えとの相違」と解答した。この解答は本時の評価基準Ｂを満たすものであった。また資料12の振り返りシートの記述では，全ての生徒が「明治政府の近代化政策の課題」を理解できており，評価基準Ｂを満たすことができていた。最後に主発問での生徒自身の選択と明治初期の人々との比較を投げかけてまとめとした。

＜資料10＞授業内容のまとめ①



＜資料11＞授業内容のまとめ②



＜資料12＞第２時振り返りシート

近代化への流れ，士族や民衆の国家への不満。
みんなが納得し満足できる制度を作るのは難しいと思った。
まだ国民になり切れていない民衆の動揺が理解できた。
国家が出来ていくにあたって，民衆は生活が変わっていき，不満が多く生まれたきた，ということが分かった。
政府の考えと民衆の考えの違いが理解できた。国を作るには民衆の反対にも対応する必要がある，と思った。
民衆に義務ができたことや士族の特権がなくなったことから人々の不満が増えたことが分かった。
民衆が大久保政権に対して不満を持っていた，というのが納得できた。大久保政権は先のことを考えているんだな，と思った。
国民の不満をすべてくみ取ることはできない。考え方の違いが内乱につながる。

３　検証授業を通じての考察

第１時では，国家の国際的立場に関する情報を集積・分類することで，明治初期の日本の国際的立場に気付くことができた。そして，明治政府の外交の目的が，19世紀の帝国主義の時代の中で，独立を維持するために一等国としての立場を獲得することであることを理解することができた。

第２時では，明治政府への民衆の不満を集積・分類・対比することで，国民の立場から近代化政策を考えることができた。また，近代化政策への国民の不満の原因を考えることで，明治政府の課題を理解することができた。加えて，抽象化という思考スキルを使用することで１時間の学習内容を簡潔にまとめることができた。

第３時では，生徒自身で集積・分析した情報を根拠として論拠を明示しながら意見を表現することができた。しかし，論述問題の題意に沿って思考の結果を表現することはできなかった。

第４時では，情報を正負の両面から考察し，その結果を根拠と論拠を明示して表現できるようになった。また，明治初期の政治史と文学史の推移を理解し，この情報を比較することで，自由民権運動の特徴の変化を掴むことができており，思考スキルを組み合わせて理解することができるようになった。

小単元「議会政治への道」を通じて，明治政府が独立の維持を最優先課題として国家運営を行っているのに対して，国民が前近代的利益を優先していることを理解することができた。また，自由民権運動の高まりを通じて，国民が近代的感覚へ成長する様子を理解することができている。

更に，資料13の振り返りシートの比較から，第２時での学習では過去の出来事を理解することに留まっていた生徒が，第４時の学習では，内容を理解することに加えて，現代政治に参加する意欲を高めていることが分かる。この様子からは，歴史的思考力のうち，歴史を「過去の人々の意志決定の連鎖」としてとらえ，自らのこれからの意志決定に示唆を得る力，が育まれていることがうかがえる。

また，小単元の評価材料となる，資料14の第４時の振り返りシートからは，明治初期の国民の成長を自らと重ね合わせて考察したことで，「我が国の立憲化に対する関心と課題意識を高め，意欲的に追究するとともに，現代社会の諸問題への関心を高めている」という関心・意欲・態度に関する小単元の評価規準を満たしたことが分かる。

＜資料13＞第２時と第４時の振り返りシートの比較

	第２時	第４時
生徒Ａ	民衆の気持ちと政府の考えが違うから，民衆が不満を持って一揆が起きた。	安倍首相が国のために何とかしようとしていることが納得できた。明治時代の政治家も安倍首相も国民の考えとはどこか違っていると思った。
生徒Ｂ	大久保政権と民衆の意見の相違がある。	最初，首相は良くないと思っていたけど，授業の後には政治家は国のために頑張っていると思えた。選挙に行きたいと感じた。
生徒Ｃ	大久保政権と国民の意見の違いで不満が起きて内乱が起きた。	最初は政治家のことを一方的にしか考えなかったけど，政治家はしっかり考えてくれているのかな，と思った。国民は政治に直接加わったほうがいい。
生徒Ｄ	この時代は民衆と政府の考えの相違が激しかった，と思った。	国を動かす人は国民の意見を聞く。国民も意見があるのなら選挙に参加するべき。

＜資料14＞第4時振り返りシート（小単元の評価材料）

政治に対する関心，選挙の大切さ，意見の表明には選挙。日本にできることはたくさんあると思う。EUの難民問題でも政府がしっかり制度を設けて難民に支援することが大切。
経済が落ち込むと人は政治から離れてしまう。自分たちにできることは選挙で意見を表明することだ。
安倍首相は世間の人から叩かれているけど，私は応援したいと思った。国を守るためにやったことで時代が変われば政治も変わると思うので行動力のある総理を応援したいと思う。
政治に参加するために選挙に行くべきだと思った。政治問題を投げやりにせずに考えていきたいと思った。
政治の仕組みや景気の流れなどが分かった。選挙が必要な理由が少しわかった。授業の中でどこを勉強しているか分かり易かった。
選挙に行くことの大切さが分かった。
国会議員にこの国を良くしてもらうためにも，私たち国民が選挙で投票することが大切なんだということを学んだ。新聞やニュースをただ聞くだけではなく，考えて自分の意見を持つことが大切だと思った。
一度よくなりかけた政治が再び悪くなったりした→安定していない。自分も選挙に行って意見を表明したい。

授業運営上の課題として，「教員が漠然とした指示を出した時には，生徒の活動が滞る」「生徒が思考の結果を表現する際，異なる意見に感情的になり，対立的な態度を示す場合がある」ことが分かった。生徒の活動や対話を重視した授業を円滑に進めるためには，「活動への教員の指示を具体的なものにして，生徒の円滑な活動を支援する」「受容的なクラスの雰囲気を形成するために，主張の優劣を競っているわけではなく，対話により思考が深化・変容することが目的であり，異なる意見を受容する態度が重要である，ことを繰り返し指導する」ことが重要であることが分かった。

Ⅳ　成果と課題

１　成果

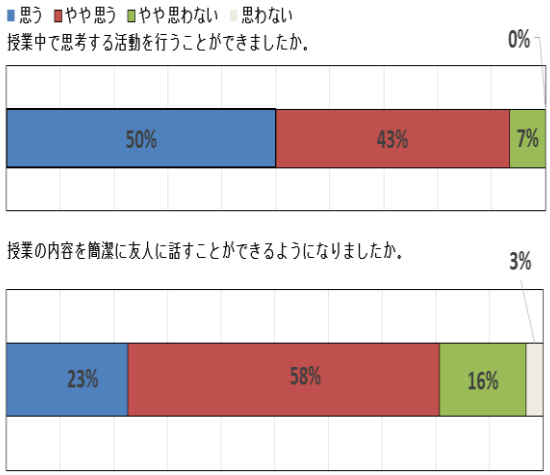
(1) 思考活動による円滑な内容理解

資料15の授業中の対話による表現活動を行うことに対する生徒の感想からは，表現活動により理解が援助されたことや理解が深化した様子が記されている。生徒は，内容理解のために表現活動を行うことの有効性を認識できている。また，表現活動により，知識・理解の獲得が円滑に行われた結果，資料16のように，93%の生徒が授業内で思考活動を行うことができている。また，81%の生徒が授業の内容を友人に話すことができる，と回答している。生徒は50分の授業内容を理解し，これを抽象化してまとめることができている。これらのアンケート結果からは，思考の結果を表現する対話を取り入れた授業で生徒の深い学習が実現したことが分かる。

＜資料15＞授業中の対話への感想①

意見を言い合うことで他人の意見を聞き，自分も理解しながら視野を広げられるのでよい。
友人の考えを聞くことができ，知識を深めることができた。
友人と話すことで内容の理解・定着ができた。
班の友人と話すことで理解できた。
友人と話し合うことで分かり易くなった。
分からないことがすぐに聞けて良かった。
相談ができたので良かった。

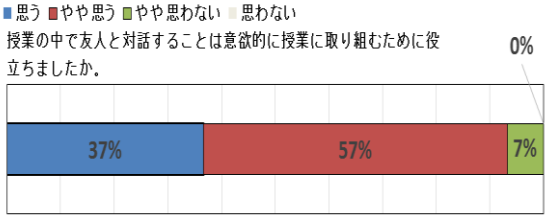
＜資料16＞検証授業後アンケート①



(2) 他者との交流による学習意欲の向上

資料17では，94%の生徒が級友との対話は意欲的に授業に取り組むために有効であると回答している。資料18では，多くの生徒が他尊感情をもって対話による学習を行っている。この尊敬の対象となった生徒は自己存在感を味わうことができ，学習意欲を向上させたと考える。

＜資料17＞検証授業後アンケート②



＜資料18＞授業中の対話への感想②

他人の意見を受け入れることは他のことにも役立つので良かった。
新しい発見や自分の意見が変わったりして理解が深まる。
色々な人の意見を聞くことで視野が広がった。
色々な考えの友人の意見を聞けて良かった。
友人の大切さが分かる。
互いの考えを教え合うことができて良かった。
自分の意見を出しつつ，相手の意見も尊重することができたことを実感している。
自分の意見を伝えたり，相手の意見を知ったりできるのでよい。
普段話さない友人と話すことができて良かった。

(3) 学ぶ姿勢の変化

検証指標に設定した「授業の中で思考した」「授業の内容を話すことができる」は80%を超えた。これは「表現活動を通じて基本的な知識を獲得し，これを基礎に思考スキルを使用した思考活動を行うことで技能的要素が満たされたこと」「対話によって自己決定感や自己存在感などの情意的要素が満たされたこと」「現代社会の問題点を考えたことによって日本史を学ぶ目的が明確になり，認知的要素が満たされたこと」の３点から生徒の学習意欲が向上したからである。つまり，対話による表現活動を通じて基礎的・基本的な知識を獲得し，思考スキルを使用した対話によって，現代社会の問題を思考・判断・表現することで生徒の学習意欲を向上させる授業は，生徒の学ぶ姿勢を主体的なものへと変化させたと考える。

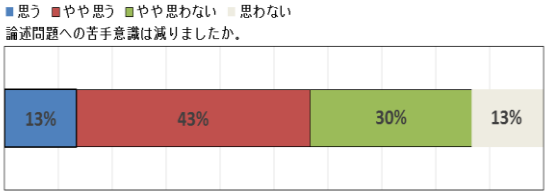
２　課題

(1) 思考以外の能力を育む方策

第２時での対話や思考スキルの活用状況から，授業の中で獲得した知識・理解を活用し，論述問題を解答することは可能であると考えた。そこで第３時では，実際に論述問題の解答に取り組ませた。しかし，生徒の活動は滞った。その理由を確認すると「何を問われているのかが分からない」「考えたことをどのように書いてよいのかが分からない」と答える生徒が多かった。また，資料19のように論述問題への苦手意識が減少した生徒は56%にとどまった。

論述問題を解答するためには，「出題の意図を適切に読み取って，題意に沿って解答することができる」「知識を基礎として，知識を組み合わせて思考することができる」「知識・理解を基礎に思考した結果を外部に適切に表現できる」という力が必要である。今回の検証授業では，具体的な支援を行った際に生徒が歴史的な思考を行うことは確認できた。しかし一方で，「題意を理解し，適切に表現する」ための力が育まれていないことが分かった。今後，出題の意図を理解する力や思考の結果を表現する指導を行う必要がある。

＜資料19＞検証授業後アンケート③



(2) 理解思考型学習の定着の必要性

生徒が授業以外でも理解思考型の学習を実現するためには生徒自身の意識変化が必要となる。村山航は，「学習者は空所補充型テストを予期すると浅い処理の学習方略を使うようになり，記述式テストを予期すると深い処理の学習方略を使うようになる」（注５）としている。授業で思考・判断・表現を重視した活動を行うだけでは，生徒に理解思考型の学習を定着させるためには不十分であり，評価問題から見直す必要がある。

(3) 用語を網羅する工夫

検証授業では思考・判断・表現する活動を重視したために，使用する用語を精選し，教科書全用語の７割程度の重要用語の伝達のみで授業を行った。しかし，現行のセンター試験は教科書記載の全用語を必要な知識とする作問スタイルである。また，資料20のように教科書に記載されている用語数が増加している一方で，高校現場での地理歴史科目の単位は減少している。今回，４時間という短い検証授業では，膨大な量の知識を網羅するために有効な方策を探ることはできなかった。「基礎的・基本的な知識技能」を効果的に網羅する方策について，継続して模索していく必要がある。

３　還元計画

次年度以降も担当指導主事との連絡を密にして，自己の授業改善を継続する。また，校内の教科会議に指導案や教材を提供することで，授業改善の提案を行う。加えて，大分県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会HPへのアップロードにより教材提供を行う。

おわりに

進学のための成績向上をより効果的に行うこと，低成績層の学習意欲を維持することを両立できる授業とはどのようなものか，と悩んだことで今年度の研修を希望した。この研修の授業改善で，当初の悩みを解決するきっかけを掴めた。一方，生徒がより深く思考するためには近現代の政治経済の知識が不可欠であり，公民科との情報交換が必要であること，また，質問の意図を的確に掴み，思考・判断の結果を適切に表現するためには，国語科との連携が必要となることがわかった。日本史の授業改善を目的とした研究ではあったが，生徒の学力をより良く育むためには，教科・科目間の意思統一と連携が最も重要であることを確認することができた。

＜引用・参考文献＞

引用文献
（注１）「高等学校学習指導要領解説地理歴史編」　ｐ９　文部科学省　2009
（注２）「高大接続システム改革会議中間まとめ」　p40　文部科学省　2015
（注３）「高大接続システム改革会議中間まとめ」　p41　文部科学省　2015
（注４）「高大接続システム改革会議」　第3回配付資料3－4　文部科学省　2015
（注５）「テスト形式が学習方略に与える影響とそのプロセスの解明」　村山航　東京大学博士学位論文　ｐ162　2006
（注６）「歴史教育用語の統計分析と基礎データ」　高等学校歴史教育研究会　P17　2014
参考文献
八柏龍紀　「日本史論述明快講義」　旺文社　2006
市川伸一「『教えて考えさせる授業』を創る」　図書出版　2008
Ｚ会出版編集部　「日本史論述のトレーニング」　Ｚ会出版　2011
泰山裕・小島亜華里　「思考スキルに焦点化した授業設計のためのパンフレット」　財団法人パナソニック教育財団　2011
日本学術会議　「新しい高校地理・歴史教育の創造　－グローバル化に対応した時空間認識の育成－」　2011
国立教育政策研究所　「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料」　2012
川島直「KP法　シンプルに伝える紙芝居プレゼンテーション」　みくに出版　2013
塚原哲也　「東大の日本史25カ年」　教学社　2014
石川晶康・神原一郎・桑山一郎・溝田正弘　「考える日本史論述」　河合出版　2014

＜資料 20＞日本史教科書用語数の変遷（注６）

	1950 年代	1960 年代	1970 年代	1980 年代	1990 年代	2000 年代	2010 年代
山川出版社	日本史 1347	詳説日本史 1985	詳説日本史(新版) 2310	詳説日本史（改訂版） 2533	詳説日本史 3250	詳説日本史 3100	詳説日本史 3408
清水書院		新編日本史 2248	日本史新訂版 1886	高校日本史三訂版 2552	詳解日本史Ｂ改訂版 2680	詳解日本史Ｂ 2251	
東京書籍		日本史 1442	日本史 1421	新訂　日本史 2388	新選日本史Ｂ 1839	新選日本史Ｂ 1981	
実教出版		高校日本史 1432	高校日本史 1638	日本史三訂版 2466	高校日本史Ｂ 新訂版 2380	高校日本史 3724	日本史Ｂ 3767